

三十二相・八十種好と波羅蜜

—— 『Karūṇāpuṇḍarīka』 を中心として ——

金 順 子

1. はじめに

三十二相とは偉大な覚りを得た人物に具わるとされる三十二種の身体的特徴を言い、八十種好は三十二相に比較して副次的・細分的な身体特徴を言う。仏教文献では古くから三十二相・八十種好が説かれているが、それらは大きく相好の項目を列挙する文献と相好の意味を説く文献とに分けることができる。前者に関する研究には、逸見梅栄氏、岡田行弘氏、三友健容氏らによる先行研究がなされている。

相好の意味を説く重要な文献として、浄土経典の一つに数えられる『Karūṇāpuṇḍarīka』がある。『Karūṇāpuṇḍarīka』に関しては、宇治谷祐顕氏による研究を初めとして、浄土教の阿弥陀仏との関連からなされた研究が比較的多い。本論文では、いままであまり研究されてこなかった三十二相・八十種好の思想的な特徴に注目し、特に『Karūṇāpuṇḍarīka』で説かれる三十二相・八十種好の獲得について考察を行った。

『Karūṇāpuṇḍarīka』のテキストには以下のようなものがある。

サンスクリット語校訂テキスト

Isshi Yamada ed. "Karūṇāpuṇḍarīka" Vol.2 New Delhi : Heritage Publishers, 1989

漢訳

失訳『大乘悲分陀利經』(8巻, 384-417年頃訳, 大正大藏經 No.158)

曇無讖訳『悲華經』(10巻, 419年訳, 大正大藏經 No.157)

チベット訳

Hphags pa sñiñ rje pad ma dkar po shes bya ba theg-pa chen-poḥi mdo, 西藏大藏經北京版 No.780

本稿では、サンスクリット語テキスト、チベット語訳、そして2本の漢訳経典を用いて検討を行う。文中で用いる略号は以下の通りである。

[梵]：『Karuṇāpuṇḍarīka』の上記校訂本

[蔵]：チベット語訳 "Hphags pa sñiñ rje pad ma dkar po shes bya ba theg-pa chen-poḥi mdo" 北京版

[分]：大乘悲分陀利經

[悲]：悲華經

[梵] P 数字 L 数字：P はページを、L は行を表わす。

2. 『Karuṇāpuṇḍarīka』における 忍辱波羅蜜と三十二相・八十種好

『Karuṇāpuṇḍarīka』では相好に関する記述が 20 カ所見られ、それぞれ様々な意味を持って説かれているが、その中でも特に注目されるのは、忍辱波羅蜜による三十二相・八十種好の獲得と布施波羅蜜による三十二相の獲得である。

『Karuṇāpuṇḍarīka』には、六波羅蜜の忍辱波羅蜜によって三十二相・八十種好を具足することができるとする記述が第四巻と第七巻の2カ所で見られる。

(1)

[梵] P.187 L.6: kṣāntisambhāro bodhisattvānaṃ lakṣaṇānuvyañjanaparipūryai saṃvartate

忍辱という資糧は、菩薩たちが相と種好を円満することをもたらす。

[蔵] 234b L.4: bzod paḥi tshogs ni mtshan dañ dpeḥ byad bzañ po yoñs su rdzogs par byed par ḥgyur ro

忍辱という資糧が、相好を円満することを為すであらう。

[分] 260b: 善男子。如來說如是菩提道。名總集淨徳度生死法門。菩薩具足行施爲度衆生故。菩薩具足持戒爲滿願故。菩薩具足忍辱成相好故。菩薩具足精進以辦衆事故。

[悲] 198b: 善男子。是名菩提。摩訶如佛所說助菩提法。所謂攝取助清淨度生死法門。善男子。捨財即是助菩提法。以調伏衆生故。持戒即是助菩提法。隨其所願得成就故。忍辱即是助菩提法。三十二相八十種隨形好具足故。

(2)

[梵] P.338 L.9: kṣāntisambhāro bodhisattvānaṃ lakṣaṇānuvyañjanapariṣūryā saṃvartate

菩薩たちが相と種好を円満することによって、忍辱という資糧となる。

[蔵] 301a L.8: bzod paḥi tshogs ni mtshan dañ dpeḥ byad bzañ po yoñs su rdzogs par byed par 'gyur ro

忍辱という資糧が、相好を円満することを為すであらう。

[分] 279a: 何謂菩薩摩訶薩資用法門。善男子。菩薩摩訶薩。有施資用得勸進。菩薩戒資用得滿願。菩薩忍資用得調心。

[悲] 231a: 善男子。云何菩薩摩訶薩助菩提法清淨之門。善男子。布施即是助菩提法。化衆生故。持戒即是助菩提法。具足善願故。忍辱即是助菩提法。具足三十二相八十隨形好故。

(1)・(2) の梵本を対照してみると、「相好円満」を意味する lakṣaṇānuvyañjanapariṣūryā の語尾が、(1) では lakṣaṇānuvyañjanapariṣūryai と為格、(2) では lakṣaṇānuvyañjanapariṣūryā と具格となっている。これに対してチベット語訳では、yoñs su rdzogs par byed par ḥgyur ro と同じ形をとっている。漢訳本では両者とも、忍辱によって三十二相・八十種好を具足することができる、と理解できることから、(2) の -pariṣūryā は誤りの可能性があり、両者とも -pariṣūryai という為格の形を取った方が妥当だと思われる。

また、(2)『大乘悲分陀利經』においては「調心」という訳語が見られる。(1)

とほぼ同じ内容が説かれていながら（２）ではなぜ「調心」という訳語を用いているのか、ということを検討すると、漢訳されるとき或は經典を写す際に書き誤りがあったのではないかということが判明した。（１）（２）の前後文章を挙げて対照すると以下の通りである。

（１）

[分]260b: 善男子。如來說如是菩提道。名總集淨徳度生死法門。菩薩具足行施爲度衆生故。菩薩具足持戒爲滿願故。菩薩具足忍辱成相好故。菩薩具足精進以辦衆事故。菩薩具足禪以調心故。菩薩具足慧以滅諸結故。菩薩具足聞爲阿僧祇辯才故。菩薩具足功德潤益一切衆生故。菩薩具足智爲阿僧祇智故。……

（２）

[分]279a: 何謂菩薩摩訶薩資用法門。善男子。菩薩摩訶薩。有施資用得勸進。菩薩戒資用得滿願。菩薩忍資用得調心。菩薩慧資用得知諸結使。菩薩聞資用得阿僧祇辯。菩薩福資用得饒益衆生。菩薩智資用得阿僧祇智。……

（１）では以下の順に菩提道が説かれている。

①施：度衆生 → ②持戒：滿願 → ③忍辱：相好 → ④精進：辦衆事 → ⑤禪：調心 → ⑥慧：滅諸結 → ⑦聞：阿僧祇辯才 → ⑧功德：潤益一切衆生 → ⑨智：阿僧祇智

それに対して、（２）では以下の順に資用法門が説かれている。

①施：勸進 → ②戒：滿願 → ③忍：調心 → ④慧：知諸結使 → ⑤聞：阿僧祇辯 → ⑥福：饒益衆生 → ⑦智：阿僧祇智

即ち、（１）では忍辱：相好 → 精進：辦衆事 → 禪：調心の順に述べられていたものが、（２）では相好から禪を飛ばして、忍辱のすぐ後ろに調心が続く形になっている。（１）の③の相好から⑤の禪までが、（２）では欠落している。これは高麗大蔵経も同様であり、どこかの時点で誤って文章が抜けてしまったものと思われる。以上のことから『大乘悲分陀利経』の（２）の

箇所においても忍辱は相好に対応するものと見てよいだろう。

3. 『Karūṇāpuṇḍarīka』における布施波羅蜜と三十二相

『Karūṇāpuṇḍarīka』では忍辱の他、布施の行による三十二相の獲得も説かれている。

[梵]P.276 L.10: Gaganamudro bodhisattva āha/ “evaṃ dattaṃ tvayā dānaṃ sattvebhyo mahatī kṛpā/ kṣīṇakāle 'smin tvaṃ nātha bheṣyase varalakṣaṇaḥ”

虚空印菩薩は言った。「このようにして汝によって衆生たちに与えられた布施は大いなる悲慰である。それが滅する時、主よ、汝は最上の相を具えた者となるだろう。(チベット語訳 mchog tu ḥgyur を参照して、bheṣyase を bhaviṣyasi に訂正する)

[分]271c: 時虚空印菩薩。以偈讚曰 仁如是行施 大哀愍衆 渴時仁爲濟 具三十二相

[悲]: 記述なし

また、『悲華經』第十卷「檀波羅蜜品第五之三」には、釈尊の前世における檀波羅蜜の実践が語られている。そのときの世界の名は選擇諸悪で、東方から五十四天下を去った閻浮提に虚空淨という名の転輪聖王として生まれ、来世には竜王となり、珍宝を無量の衆生に施す誓願を立てる。転輪聖王はその誓願を以て、「一切施」という字号を授かるが、それを聞いた衆生たちは王の場所に来て、後宮・夫人・姪女・兒息をはじめ、王の身体を乞う。王は足を布施することで来世に無上戒足を具足することを願う。また、目を布施することで無上五眼を、耳を布施することで無上智耳を、男根を布施することで馬藏相を、血と肉を布施することで無上金色之相を、舌根を布施することで広長舌相を具足することを願う。

有婆羅門名曰盧志。復來從我乞其兩足。我聞是已心生歡喜。即持利刀自斷二足持以施之。施已發願。願我來世具足當得無上戒足。有婆羅門名曰牙。復來從我乞索二目。我聞是已心生歡喜。即挑二目持以與之。施已發願。願我來世當得具足無上五眼。未久之間有婆羅門名淨堅牢。復來從我乞索二耳。我聞是已心生歡喜。尋自割耳持以施之。施已發願。願我來世當得具足無上智耳。未久之間有尼乾子名想。復來從我乞索男根。我聞是已心生歡喜。尋即自割持以施之。施已發願。願我來世成阿耨多羅三藐三菩提得馬藏相。未久之間復有人來。從我乞索其身血肉。我聞是已心生歡喜即便施之。施已發願。願我來世具足無上金色之相。未久之間有婆羅門名曰蜜味。復來從我求索二手。我聞是已心生歡喜。右手持刀尋斷左手。作如是言今此右手不能自割。卿自取之。作是施已復發願言。願我來世具足當得無上信手。……我於爾時所捨舌根。令諸虎狼鸚鵡鷲食之飽足。以願力故復生如本。假當聚集如耆闍崛山。作是施已。復作是願。願我來世具足得成廣長舌相。(T0157_03.0228b11)

その生を終えた王は本願力によって7回に亘って竜王の身を受けて、無量無辺の宝蔵を諸衆生に与え、衆生を満足させた上、さらに来世に三十二相を得ることを願う。これが、如来が菩薩のときに深重に精進して三十二相を求めた因縁であると説かれている。

善男子。汝今當知是謂如來爲菩薩時深重精進求三十二相之因縁也。
(T0157_03.0229a12)

上記のように、『悲華經』の「檀波羅蜜品」には自らの身体を布施するような自己犠牲の実践が多く描写されており、身体を截断されるような苦を受けても、菩薩は怒ったり後悔することなく、喜んで布施する姿が描かれている。

4. 六波羅蜜と三十二相・八十種好

『Karunāpuṇḍarīka』以外の文献では、諸波羅蜜と三十二相・八十種好とがどのように結び付けられているのかについて見ていくことにする。

①布施波羅蜜

『増一阿含經』卷第四には、施しの果報によって仏道を成して、三十二相を具え、無上法輪を転ずるとする。

布施成佛道 三十二相 具 轉無上法輪 本施之果報
(T0125_02.0564b16)

『佛說佉眞陀羅所問如來三昧經』中卷には、菩薩が行うべき32種の檀波羅蜜が説かれ、その31番目は菩薩が布施を行って三十二相・八十種好を得ることを欲することであるとする。

施與人。欲反成就菩薩故。三十一者菩薩布施與人。欲得三十二相八十種好故。(T0624_15.0356b27)

『大智度論』第11巻「初品中檀相義」には、布施が三十二相を得る因縁となることを記している。

布施是得三十二相因縁。(T1509_25.0141b11)

②忍辱波羅蜜

支謙訳『仏説維摩詰經』上巻、鳩摩羅什訳『維摩詰所説經』上巻には如来が菩薩のときに行った忍辱波羅蜜の修行によって、その仏国土に生まれる衆生は三十二相で莊嚴されるということが説かれている。

菩薩忍辱爲國故。於佛國得道。有三十二相而自嚴飾。以其忍行調正人民生于佛土。(T0474_14.0520a24)

忍辱是菩薩淨土。菩薩成佛時三十二相莊嚴衆生來生其國。
(T0475_14.0538b07)

また同經のサンスクリット語テキストからの和訳では、該当箇所は次のようになっている。

善男子よ、忍辱という国土が菩薩の仏国土である。彼が菩提を得たならば、三十二相に莊嚴され、忍耐と自制と寂靜の最高の状態に到達した衆生たちが仏国土に生まれる。(高橋・西野 2011:p.21, ll.2-3)

ここでは八十種好は説かれていないが、『悲華經』が編纂される以前から忍辱波羅蜜による修行が三十二相と結び付いて説かれていたことが分かる。

忍辱波羅蜜による三十二相・八十種好の獲得は『悲華經』以外に、著者不明・

北魏の菩提流支訳『弥勒菩薩所問經論』、天親造・鳩摩羅什訳『発菩提心經論』の中でも見ることができる。

『弥勒菩薩所問經論』第六卷

布施莊嚴十善業道。成就大利益。持戒莊嚴十善業道。成就一切佛法願。
忍辱莊嚴十善業道。成就三十二相八十種好佛妙音聲。精進莊嚴十善業道。
成就佛法降伏一切諸魔怨敵。思惟莊嚴十善業道。成就聞慧思慧修慧堅固
清淨。般若莊嚴十善業道。成就離諸邪見。(T1525_26.0257a27)

『発菩提心經論』上卷「誓願品」

復次布施是菩提因。攝取一切諸衆生故。持戒是菩提因。具足衆善滿本願
故。忍辱是菩提因。成就三十二相八十隨形好故。精進是菩提因。增長善
行於諸衆生勤教化故。禪定是菩提因。菩薩善自調伏能知衆生諸心行故。
智慧是菩提因。具足能知諸法性相故。取要言之。六波羅蜜是菩提正因。
(T1659_32.0510c03)

『発菩提心經論』の著者に関しては、伝承に従って天親（ヴァスバンドウ）
作とする見解がある一方、ヴァスバンドウ作ではないと見る研究者もいる。
大竹晋氏は、『発菩提心經論』がヴァスバンドウの作でも鳩摩羅什の訳でも
なく、中国において複数の漢訳經典に基づいて作られた偽論であると論じて
いる（大竹 2013:pp.176-211）。そのため、『悲華經』『弥勒菩薩所問經論』『発
菩提心經論』の成立順序を確定することは困難であるが、おおむね4～5世
紀までには、忍辱波羅蜜による三十二相・八十種好の獲得が大乘仏教の教理
の中に受容されていたことは明らかである。

③般若波羅蜜

『道行般若經』卷第九「薩陀波倫菩薩品」では、薩陀波倫菩薩が師匠から
般若波羅蜜の教えを聞いて、実践し、守ることで、仏法を得て、三十二相・
八十種好と十種力・四事不護・四事無所畏・十八事不共を得ることができる
とする。

薩陀波倫菩薩報女言。師在東方。師名曇無竭。當爲我說般若波羅蜜。我
聞者當行守之。當用疾得佛。我身當得三十二相。八十種好。十種力。四
事不護。四事無所畏。十八事不共。當得法輪轉。當度脱十方天下人。

(T0224_08.0472c07)

『放光般若経』巻第一「放光品」では、菩薩が三十二相・八十種好を具えたいと欲するならば、般若波羅蜜を学ぶべきだと説く。

菩薩摩訶薩欲具足大士三十二相八十種好。成諸菩薩種姓速得鳩摩羅浮者。當學般若波羅蜜。(T0221_08.0003a09)

④ 六波羅蜜

『放光般若経』巻第二「摩訶般若波羅蜜學五眼品」には、六波羅蜜を行った菩薩は三十二相を具足し、諸根が特異であり、その身体を見た衆生は皆尊敬し、歓喜したという記述が見られる。

復有菩薩行六波羅蜜。便具大士三十二相諸根特異。衆生見者莫不敬喜。因其歡喜以三乘法。而度脱之令般泥洹。(T0221_08.0008b09)

『大方広仏華嚴経修慈分』巻第一では、菩提を求める衆生が常に「六波羅蜜」の修行に従うならば、速やかに無上正覚を得て、十力、四無所畏、十八不共法、三十二相・八十種好を具足するとされる。

佛子。若有衆生。爲求菩提。而修諸行。願常安樂者。應修慈心以自調伏。如是修習。於念念中。常具修行六波羅蜜。速能速及諸忍之地。速得圓滿無上正覺。具足十力四無所畏。十八不共法。三十二相。八十種好。最上功德。莊嚴其身。盡於未來。常住安樂。亦能除滅。一切衆生無始已來諸業重障。(T0306_10.0959b16)

以上のように、三十二相・八十種好と波羅蜜との関係は、『Karūṇāpūṇḍarika』などで見られる忍辱波羅蜜、布施波羅蜜の修行によるもの以外に、特に般若經典の系統では般若波羅蜜、六波羅蜜の修行による獲得も説かれている。この内、般若波羅蜜と六波羅蜜は、他の諸波羅蜜を統括する意味を持つものと解すれば、忍辱波羅蜜と布施波羅蜜による2つの伝承があったと思われる。特に、忍辱波羅蜜による獲得が強調されているのが特色であると言えるだろう。

また般若經典類の中でも、最古層に属する小品系の『道行般若経』と、それに続くであろう小品系の『放光般若経』において、般若波羅蜜を聞き、あ

るいは学ぶことによって三十二相・八十種好が得られるとしていることは注目される。

5. まとめ

- (1) 『Karuṇāpuṇḍarīka』では忍辱波羅蜜による三十二相・八十種好の獲得、そして布施波羅蜜による三十二相の獲得が説かれている。忍辱波羅蜜による三十二相および八十種好双方の獲得は、今のところ『Karuṇāpuṇḍarīka』以前の経典でその例を見出すことができなかつた。しかし、支謙訳『仏説維摩詰経』の中に忍辱波羅蜜と三十二相との相互関係が見られることから、『Karuṇāpuṇḍarīka』は『仏説維摩詰経』の影響も受けているのではないかと思われる。布施波羅蜜に関連しては三十二相のみの獲得が説かれていることから、同じように布施波羅蜜による三十二相の獲得を説く『増一阿含経』と何らかの関係があった可能性が考えられる(宇治谷 1971:pp.71-75)。
- (2) 諸大乘経典において、三十二相・八十種好は布施波羅蜜、忍辱波羅蜜、般若波羅蜜、六波羅蜜によって獲得できると説かれている。三十二相・八十種好を獲得するとは、ブツダの身体、それも目に見える特徴を持つ色身を得ることを意味するものである。従って、波羅蜜によって相好を得るとは、波羅蜜を実践することによってブツダになることができる、と説いているのに等しいことになる。

梶山雄一博士によれば、初期の般若経典類は次のような分類と年代が考えられている。

基本般若経—『八千頌般若経』 西起前後～50年ころ

拡大般若経—『十万頌般若経』『二万五千頌般若経』『一万八千頌般若経』など

後100～300年ころ(梶山 1976:p.104)

上記の般若経典は、小品系である『道行般若経』が基本般若経、大品系である『法光般若経』が拡大般若経に相当することになる。

般若經典において、いかにして菩薩はブツダになり得るのかを説く際に、波羅蜜、特に般若波羅蜜の実践を最重要視するのは当然である。しかもこれらの經典は、初期の般若經典であると同時に、初期の大乗經典でもある。そこに説かれる「波羅蜜による三十二相・八十種好の獲得」は、すべての大乗經典においても最重要の主題となり、後続の大乗經典に継承されていったと考えてよいだろう。

- (3) それではなぜ、『Karuṇāpuṇḍarīka』では忍辱波羅蜜と三十二相・八十種好が結びつくのであろうか。実際には『Karuṇāpuṇḍarīka』においても、忍辱波羅蜜ばかりではなく布施波羅蜜が三十二相を得る因縁であることも説かれている。すると一つには、波羅蜜の中でも特に忍辱波羅蜜の実践によって相好を獲得するという伝承と、布施波羅蜜によるという伝承の二通りが大乗仏教の中にあり、『Karuṇāpuṇḍarīka』にはそれらが統合あるいは合成されていると解釈することが可能であろう。

もしくは『Karuṇāpuṇḍarīka』自身で行っているように、波羅蜜などの菩提道、すなわち悟りへの実践項目を、それによって得られる結果であるブツダとしての徳目に当てはめていった際に、忍辱波羅蜜が三十二相・八十種好に配当された、と考えられる。他の菩提道の項目とブツダの徳目との対応を見ると、全く無関係で意味の無い対応ではなく、両者の間には相関関係が認められる。したがって、忍辱波羅蜜と三十二相・八十種好の対応にも、何らかの必然性があったと見るべきであろう。

その必然的理由は、現時点では確定することはできないが、忍辱波羅蜜と三十二相との結びつきを説く『維摩経』が大きな意味を持つことは確実である。

参考文献

Isshi yamada ed. "Karuṇāpuṇḍarīka" Vol.2 New Delhi : Heritage Publishers. , 1989

石上和敬 1999 「Karuṇāpuṇḍarīka に見られる釈迦如来の五百願について

- て」『仏教学』40 三喜房仏書林 pp.85-107
- 宇治谷裕顕 1971 「悲華經の檀波羅蜜行について」『印度学仏教学研究』20-1
- 同 1969 『悲華經の研究』 文光堂書店
- 大竹 晋 2013 『元魏漢訳ヴァスバンドウ釈經論群の研究』 大蔵出版
- 岡田行弘 1989 「三十二相大人相の系統(I)」日本印度学仏教学会編 『印度学仏教学研究』38-1
- 同 1991 「三十二相大人相の系統(II)」日本印度学仏教学会編 『印度学仏教学研究』40-1
- 同 1991 「八十種好」『前田専学博士還暦記念論集 <我>の思想』 春秋社
- 同 1992 「三十二相大人相の系統(III)——『賢劫經』の三十二大人相——」日本印度学仏教学会編 『印度学仏教学研究』41-1
- 同 1996 「三十二大人相の成立」『勝呂信静博士古稀記念論文集』 山喜房仏書林
- 梶山雄一 1976 『般若經』 中公新書
- 島田 明 2011 「仏塔から仏像へ」『大乘仏教の実践 シリーズ大乘仏教3』 春秋社 pp.127-165
- 高橋尚夫・西野翠 2011 『梵文和訳 唯摩經』 春秋社
- 逸見梅榮 1982 『印度に於ける礼拝像の形式研究』 東京美術
- 三友健容 2007 『アビダルマディーパの研究』 平楽寺書店